

百年史編集室のレファレンス記録

小川 千代子

目次

はじめに

一 数値にみる百年史編集室のレファレンス

1 レファレンス件数

2 質問者のプロフィール

3 質問の内容

4 回答状況

二 資料——問いとこたえの記録

三 補記

掲載図表一覧

図1 調査依頼票の様式

図2 各年度別レファレンス件数

表1 各年度別レファレンス件数

表2 所属別質問件数

表3 質問の内容別件数

表4 質問内容による回答率

はじめに

百年史編集室が『東京大学百年史』の編集・刊行のほか、公式な活動として『東京大学史紀要』の発行、『東京大学史史料目録』の刊行等を行っていることは比較的よく知られている。しかし日常業務の中

に早くから定着しているレファレンス活動は随時各所から百年史編集室（以下「編集室」と略す）に向けられてくる問い合わせの応対については、これ迄公式の業務として見られることはなかった。

学内外からよせられる問い合わせは編集室発足当初からポツポツあったものの、それに対する回答活動はレファレンス・サービスは、編集室のかかえる本来的業務としてではなく、個人的なつながりを軸とした「善意による無料奉仕」と把握されてきたのである。問い合わせの対応は編集室が発足するまでは、事務局庶務部広報企画課広報掛、総合図書館参考掛などが主に取扱ってきたらしい。それは問い合わせの取り扱いもまたぎきをする質問者が今も右の二掛に目立って多いことから明らかである。それが、昭和五十年四月、編集室の発足に伴い、我々の方へ集中するようになってきた。

ところが、昭和五十五年に編集室が行った「外国大学文書館に関する調査」（後掲「参考資料(二)」中、『東京大学関係諸資料の保存と利用に関する予備的研究報告書』および、小川千代子「SAAと大学アーカイヴズについて」(『東京大学史紀要』第四号、昭和五十八年七月)を参照されたい)で、欧米の多くの大学文書館がレファレンス活動を史料の収集・整理、利用提供等と並び称される中心的業務と考えて

図1 調査依頼票の様式

東京大学百年史編集室調査依頼票

昭和 年 月 日

ふりがな		
氏名	住所	電話
所属名称	機関住所	電話
紹介者		
調査依頼期	昭和 年 月 日	
調査事項		
調査目的		
備考		

サイズ：B5判

百年史編集室のレファレンス記録

えた後、直ちに「編集室では統計をとっているの」と断った上で、氏名、住所、所属機関等の項目について質問者に回答してもらい、それを調査票に記入

レファレンスを一件毎に記録する「東京大学百年史編集室調査依頼票」は図1に示した様式である。編集室では質問者に対する回答を終

一、数値にみる百年史編集室のレファレンス

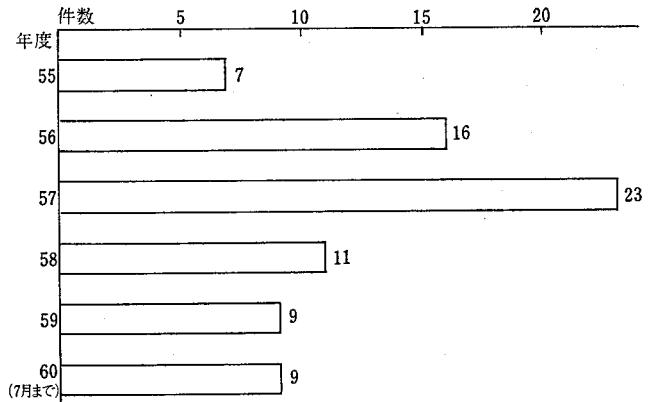
レファレンスを一件毎に記録する「東京大学百年史編集室調査依頼票」は図1に示した様式である。編集室では質問者に対する回答を終ることにした。

今、百年史編集室には「電話による調査依頼票つづり 一九八〇・九」という一冊のファイルがある。綴られている調査依頼票は表題のとおり、最初のものの日付が昭和五十五年九月、そのあと昭和六十年七月の76番目までを数えている。ファイルの厚さは、各種参考資料のコピーや時には手紙なども一緒にとじこまれているために現在二センチ近い。この76件の調査票を綴ったファイルは、百年史編集室がその編集業務の傍ら、各所からの問い合わせに應對してきた東京大学の歴史に関するさまざまな「レファレンス」の記録なのである。

表1 各年度別レファレンス件数

年度	昭和55	56	57	58	59	60 (7月まで)
件数	7	16	23	11	9	9

図2 各年度別レファレンス件数



する。「調査事項」には質問の内容、「備考」には質問に対する回答の内容を、あらかじめとったメモ等を参考に記入し、メモ類や資料のコピー等は出来るだけ調査票と共に綴った。現在綴られているのは76件のレファレンス記録である。

まず全容を概観するため、若干の統計数値を見ていこう。

1 レファレンス件数

各年度毎のレファレンス件数は表1および図2で示した。昭和56・57・58年度の質問件数に比べて昭和59年度は目立って少ない。編集室

表 2 所属別質問件数

個人	13件
出版	12
民間	10
学外	9
学公	9
放機	9
研公	5
他大	5
新学	3
不学	1
合計	76

全体が『東京大学百年史』の編集業務に集中して、調査依頼票の記録作成が不十分だったためである。先にも述べたように、レファレンス活

動が「善意」によっている現状ではどうしても編集業務に本務の忙しさとレファレンス記録の多寡は反比例する。昭和60年度は七月までの四カ月足らずの間に既に9件と前年度十二か月間の件数と同数になる勢いだが、この傾向は編集室が『東京大学百年史』編集の仕事に慣れて余裕が出てきたためであろうか。

2 質問者のプロフィール

さて、質問者はどのような人々なのか。表2・所属別質問件数にあらわれているように、質問件数のトップは個人、次いで二位に出版関係、三位は民間団体、四位に学内、学外公的機関、放送がならび、以下七位研究者、他大学等、九位新聞の順である。

この他、数値として把握できなかったが学内外からの問い合わせの取次ぎ窓口となっている各部課の存在を忘れてはなるまい。特に学外からの問い合わせを多く取次ぐのは、今では電話交換台が筆頭である。東京大学は代表番号で電話交換台による内線取次ぎが行われているが、外部からの問い合わせの場合、交換台に質問の趣旨を告げれば編集室につなぐというルートが最近ではどうやら確立している。編集室発足当初は庶務部広報企画課が取次ぎの筆頭であったが、『東京大学百年史』

の編集刊行事業の進捗と共に入れかわった模様である。次いで総合図書館参考掛、これも『百年史』刊行の進捗に従って取次ぎ件数が増加している。反対に史料編纂所は初期のころからくくられて取次ぎ件数が大きく減少して、最近では滅多に交渉はなくなった。編集室の取扱う史料と史料編纂所のそれとの差異が、ようやく周辺にも認められ定着してきた証拠である。

さて、話題をもとに戻し、質問者の所属について、具体的にみながら説明してみよう。「個人」とは、質問の内容や方法からみて、質問者が職業上行っている研究内容に直接結びつく場合（これらは「研究者」として別に数えた）を除く、私的立場からの質問者である。例えば東京大学の教官でも個人の立場で質問してきた場合や、著述業を名乗る人、自著校正中という人などはこの「個人」に分類した。「出版関係」の質問者には、岩波書店、三省堂、吉川弘文館、新潮社などとならんで、同人誌の編纂者も含まれている。「民間団体」には日本学術協会、物理学会等の学会・協会、横河電機製作所（現・横河北辰電機）、四国電力、理研製鋼、明治屋等の企業、映画「瀬戸内少年野球団」製作部、単行本のイラスト製作プロダクション等々を一括した。「学内」は文字通り東京大学内の各部局からの意味で、事務局庶務部、総合図書館、明治文庫といった編集室に関係深い部局の他、法学部、農学部等も名を連ねている。「学外公的機関」は、文部省をはじめ宮内庁書陵部、東京国立文化財研究所、国立公文書館、国会図書館といった国立の史料保存利用機関をはじめ北九州市史編集室、森鷗外記念図書館等々である。「放送」はテレビ局、それもNHKが多い。

NHKクイズおもしろゼミナール、TBSクイズダービー、日本テレビウルトラクイズといったクイズ担当者からは調べがいのある難問・奇問をよせられている。ドラマ担当者からの時代考証関連の質問は、後日それがどのように生かされるかというささやかな期待と楽しみをもたらした。「新聞」は朝日、赤旗、日経の三紙に止まった。「他大学等」は大阪大学、一橋大学、学習院大学の他、旧制高校OB会も含む。

ここで、質問件数第四位の学外公的機関からの質問に注目したい。先述のように質問者には国立公文書館、宮内庁書陵部、国会図書館、東京国立文化財研究所など、国立の史料保存利用機関がズバリと揃っている。質問内容の約半数は資料さがしである。この事実編集室が国レベルの史料保存利用機関から既にその存在を認知され、レファレンス要求にも耐える機関ととらえられており、実態上は「大学図書館」の機能を果たしている、乃至果すことを期待されていることを示唆している（レファレンスと同時に始めた閲覧者の統計でみると約半数が学内外の個人研究者、四分の一は学内の事務系職員の参照閲覧であり、やはり同様の方向を示している）。学内から事務手続上の

表3 質問内容別件数

内 容	質問件数
確認し他明	36件
項目が	17
資料の	20
資	2
不	1
合 計	76

必要により過去の類似例の有無について質問を受けたことも、同じ様な傾向である。

3 質問の内容

質問内容別件数（表3）をみてみよう。「東京大学は昔、どこにあっ

たのか」「××は本当か」のような事項確認が最も多く47パーセント、「××に関する資料」「××が記されている原本の存在」といった資料さがしが26パーセント、「○○という人はいつ何学部にしたのか」「○○先生はいつからいつまで在職したか」など人物しらは22パーセントと意外に少ない。

これを質問者別にみると、事項確認では「民間団体」と「放送」、「出版関係」が一〜三位で、質問数も約三分の二を占めている。これに四位の「個人」からの質問数を加えると何と四分の三である。資料

さがしは「学外公的機関」（四件）、「研究者」（三件）が一位二位を占めている。編集室にある史料群の価値を示すデータである。人物しらべの質問は「個人」の場合は約半数であるのに対し、「研究者」では、それが全くないという際立った差がある。全体に「個人」以外の質問者からは人物さがしの質問をうけることは少ない。

4 回答状況

さて、質問に対する回答状況をみておこう。表4では質問に対して何らかの回答をしているものを「可」、「なし」「わからない」という回答を「不可」、別の機関や人を紹介したものは「他紹介」、回答内容の記録が調査票にないものを「不明」として百分率で表示した。事項確認と人物さがしは、おおむね「可」であるのに

表4 質問内容による回答率（%）

質問内容	可	不可	他紹介	不明	計
確認し他明	71	8	5	16	100
項目が	59	24	0	17	100
資料の	25	40	15	20	100

対し、資料さがしは「不可」が40パーセントで「可」の25パーセントを上回っているのが特徴である。

ところで、質問者の性別と回答状況をみると、女性に対しては「不可」が丁度50パーセントであった。男性17パーセント、性別不明（記録なし）の9パーセントにくらべ異常な高さである。女性質問者は、代理で電話をかけてくる場合も多く知っている情報を十分に提供できないまま回答を求める傾向があるが、こうした質問方法には無理があることを数値的に示しているのかもしれない。不確かな情報からは不十分な回答しか得られないものである。逆に些細な事柄と思われることでも関連事項として情報があれば、質問の回答を得るのに大いに役立つ。後掲資料中の、小原省三という人物に関する質問で、質問者が「因みに同人は石黒男爵と同年代で親交があったと伝えている」旨を知らせてくれたので、その石黒忠恵の著書から回答を引出すことが出来た場合などは好例であろう。

二、資料 — 問いとこたえの記録

凡例

- 1 各件中の↓印以上は図1に示した調査票の「調査事項」、以下は同じく「※備考」欄中に記された内容を掲げた。
- 2 調査票中に記載がないときは、「記録なし」とした。それ以外の「」内は筆者が付した補足事項である。
- 3 明らかな誤字等は訂正した。便宜的な表記、例えば明治を明、M、東京大学を東大とするなどは、そのままにした。
- 4 掲載事項はあくまでも調査票の記録によっており、実際の質問者とのやりとりの内容とは必ずしも一致するものではない。

・「渡辺洪基関係文書」は東京大学のどこにあるのか、所在を教えてください ↓史料編纂所

・東京大学の校旗の規格を知りたい ↓広報企画課まわし

・一高教授「杉某」の名前と担当教科調査 ↓杉敏介、国文学・国文学法担当、のちに校長となる。参考文献「ああ玉杯に……」「真の教育者杉敏介先生」「敏」の字につき再問合せ有

・開成学校、東京開成学校、東京大学予備門、第一高等中学校についてその成立年代問合せ ↓『東京大学史略年表（稿）』により回答

・山田耕筈の生家（旧森川町一〇番地、明治42年当時）の東京大学敷地内への編入時期について ↓「記録なし」

・明治4年4月25日付大学から政府あての建言書の原本について ↓「記録なし」

・市村瓊次郎の履歴について ↓明20・7・20帝国大学文科古典講習科漢書課卒業、明21・12・24学習院教師、明31・8・21任東京帝国大文科大學助教、明38・7任同教授、大14・3退職、大14・7名誉教授、昭和22・2死亡

・昭和17年10月9日「修業年限短縮に関する対策に付きて」の複写依頼 ↓非公開資料である旨回答

・東京帝国大学文科大学の公開講座の成立と経緯（女子の聴講許可）及び女子の大学聴講生制度の変遷につき質問 ↓村田鈴子「わが国女子高等教育成立過程の研究」及び田中征男「大学拡張運動の歴史的研究」を紹介

・『日本帝国大学文科大紀要』明治10年「アイヌ語文典」有無 ↓

〔記録なし〕

・『東京大学新聞』関係事項↓〔記録なし〕

・明治14年前後の東京大学の正式名称↓東京大学／神田錦町にある小石川植物園分室の正式名称↓白山御殿にしか小石川植物園はなく、その分園は明治35年日光字蓮花石に創設したのが初めてである。

・チェンバレン在職当時（一八八六一一八九〇）の大学の名称（日本語・洋語）問合わせ↓〔記録なし〕

・西洋史担当外国人教師ルードウキヒ・リースの招備期間↓明治20・2・4〜明治35・7・31

・明治初期の運動会について。明治8年開成学校当時、スタートの時、「よいい、どん」と言わずに、「よろしゅうございますか」と言ってから振った(?)ということを知っているが、その裏付けがほしい↓「明治十六年に入り東京大学に於て、初めて陸上競技会を開催する気運に達した。第一回東京大学運動会のスターターは当時大学の幹事たりし服部一三氏で、「イムカ」、「一二三」と破れた蝙蝠傘を振ると同時に出発したものである。」〔岸清一伝〕一七八頁)

・旧制高校の復員学生受入れに関する文部省通達↓〔記録なし〕

・戸水寛人休職の日付について、明治38・8・12付と言われているが任免書類中に該記録なし↓戸水履歴書により回答

・昭和20年9月5日付文部次官発「陸海軍諸学校出身者及び在学者等の（高等専門学校転校又は）編入学実施要領（項）」の現物はありませんか↓見当らず

・平賀元総長の伝記等刊行物はないか。海軍時代の業績について↓なし。遺族連絡先を紹介

・昭和43〜44年、大学紛争当時の安田講堂占拠の期間↓第1回S43・6・15〜6・17、第2回S43・7・2〜44・1・19

・東京帝国大学が東京大学と名称変更した時点はいつか↓昭和22年10月より「東京大学」と表示

・明治2年当時の東京大学の名称は↓〔記録なし〕

・『旧工部大学校史料』口絵にある「虎ノ門夕景」の著作権について↓出版社の名称、連絡先を紹介

・M10年頃、東京大学の入学式はどんな内容だったのでしょうか↓〔記録なし〕

・東京帝大セツルメント労働学校とは何か。ここを卒業した場合は「東京大学××学部セツルメント労働学校卒」となるのか↓セツルメントは学生団体なので、「東大××学部」とはなるまいと回答
・旧東京大学第一回運動会のプログラムは何か↓『学士会月報』明治22年10月号に第三回プログラムがあり、柿拾い競走があった。パン食い競走は見当らず

・昭和14年4月〜15年3月まで菊池奨学金をうけたという人がいるが調査したい↓評議会記録S14・5・15付に同奨学金の件がある

・一高（駒場キャンパス）時計台一号館の建造時期はいつか↓同窓会報により調査、昭和8年頃とわかる

・物理関連の百年史担当者を教えて下さい↓委員（工学部）を紹介。「アーカイヴズ」について先方より言及あり

・戦時下(S 18~20)に東京大学の特別研究生(学生も含む)を新潟県下に集団疎開させた事実はあるか↓内田文書「雑・参考資料」S 20中の資料、及び南原回顧録により、周辺の事情を説明。依頼の件の該当事実なし。但し、文学部学生の勤労働員及び各学科の図書疎開の事実はある

・貢進生坪井センジロウのその後の履歴について↓唐沢富太郎『貢進生』三四二頁、「坪井徳次郎」のコピーを作成わたし

・石川石代(明治期本学卒業生)に関して↓結局不明

・昭和20年の卒業式の時日について↓評議会記事要旨より、S 20・9

・25、卒業証書授与式施行

・東洋文化研究所設立(S 16・11)以前に「東亜文化研究所」というものはあったか否か↓評議会記録、東文研設立の件、可決S 16・2

・14、東文研設立経緯報告S 16・5・6

・拝啓、日頃は種々お世話になっております。昨日お電話でお願い申し上げました貴校の英文名をご教示賜りたくお願い申し上げます。

なお原稿ですが当方の年譜の原稿を同封致しますので、ご参考としていただきたく。ご多用のところ恐縮ですが同封の封筒にてご投函

いただくようお願い申し上げます。敬具/記1虎門工科大学校予備校、2帝国大学工科大学造家学科、3東京帝国大学工科大学、4東京大学工学部建築工学科、以上↓前略先日お問合せのありました英語名称4件について下記のとおりお知らせ申し上げます。記/1虎門工科大学校予備校 Imperial College of Engineering, Preparatory

School、2帝国大学工科大学造家学科 Imperial University, College

of Engineering, Course of Architecture、3東京帝国大学工科大学 Imperial University of Tokyo, College of Engineering、4東京大学工学部建築工学科 University of Tokyo, Faculty of Engineering, Department of Architecture、なお、1~4いずれの場合にも定冠詞“The”はつけたりつけなかったりしているようです。また、2の Imperial University は、「大学一覽」等の印刷物には Imperial University of Japan としている場合もあるようです。おたすねにはありませんでしたが、「東京帝国大学工学部」と称されていた時期の英語名称は、Imperial University of Tokyo, Faculty of Engineering でありましたので、念のため申し添えます。

・明治10年代の東大の学生の服装。企業広告のためのイラストレーションを表現する上で明治19年ごろの学生の服を調べる↓『東大のあゆみ』『日本学生の歴史』を参照してもらう「あとで掲載誌受領」

・『東京帝国大学五十年史』283p岩佐純(東校時代第一回留学生の決定をした人物)および弟の岩佐敏のパーソナルヒストリーを知りたい↓工学部沿革史料室に依頼。報告書と資料受領

・昭和20年当時、それ迄の植民地人であって、その後本国籍に戻った中国人・朝鮮人で本学の講師以上の人がいたかどうか。いたとしたらその人の氏名等をおしえて下さい↓『東大一覽 昭18~27』中の「職員移動」、文部省年報昭19・20により調査。文学部講師(支那文学か支那語学担当)の曹欽源(中華民国:推定)が昭和18・9・30~同21・9・30まで在職。これは終戦をはさむ唯一の中国人教師。昭20・4・30調査では、独仏の教師は外数として教員数に入っ

ていないが、曹は含まれているようである

- ・ 東京開成学校初代校長島山義成の関係資料特に同氏M9没時の葬儀関係資料はないか↓資料なし

- ・ M6農事修営場勸農寮（現新宿御苑）の写真はないか↓ナンシと回答

- ・ 東大の銀杏のバッヂ制定の年月日を知りたい↓『本郷の学生生活』

82年版52頁に由来あり。コピー送付

- ・ 大正10年代、宮内省維新史料編集官、樹下快淳（じゅげのけいじゅん）について、無給副手、囑託、文or史料↓〔記録なし〕

- ・ 一九二八（昭和3年）3月の卒業式での小野塚総長代理の訓辞↓帝國大学新聞昭和三年四月日号コピー送付。掲載紙コピー受領。

- ・ 前略突然お便りをさしあげる失礼をお許しください。ご多忙中まことに恐縮ですが、調べていただきたい事項があり筆をとった次第です。渡辺為吉は明治時代に帝國農科大学を卒業したと聞いております。今、個人的にその経歴を調べて年譜を作りたいと思っておりますが、貴編集室に同窓会名簿などがございましたら次の点についてお知らせいただけませんか。①渡辺為吉の卒業年次と学科、②最終勤務地での役職名／なお、はっきりしたことはわからないのですが、為吉は農科大学卒業後、石川県庁を経て、明治36〜39年頃には山梨県庁に在職し、昭和の初期から昭和10年代の前半まで朝鮮総督府で林務関係の仕事をしており、そこで停年を迎えたように聞いております。この最終の朝鮮総督府における課名とか肩書とかを知りたいのです（昭和15年に病死しております）。ただし、農科大学ではなくて農業大学の可能性もあるのですが、もし、このよ

うな人物が同窓会名簿等の中になりましたら、以上の点でご教示いただきたく、お願い申し上げます。ご多忙中、個人的なお願いで誠に恐縮ですが、何卒よろしくお願いいたします。草々↓拝復大変遅くなりましたが、貴信についての調査結果をお知らせいたします。

- ①渡辺為吉氏の卒業年次と学科ですが、卒業生（者）名簿に同名の方は見当たりません。貴信にもありますように、農業大学の可能性を考える必要があります。②最終勤務地での役職名については、昭和10年の職員録で朝鮮総督府の項を調べました。しかし、やはり同名の方を見出すことはできませんでした。もう少し詳しい情報があれば、或いは他資料検索の手がかりとなるかも知れませんが、今回の調査ではお役に立てず、申し訳ありません。以上調査結果のご報告まで。敬具〔後日、礼状受領〕

・ 明治20年、西郷四郎が本学柔道部に来てトコナメタケジロウ等を指導したということについての裏付け↓調査不能（東大年報を見たが行事以外は学生に関する記事なし）

- ・ 昭和23年旧制一高を卒業した友人の談に、「自分は23年の編入に失敗した。翌24年に新制教養学部が発足したが、自分は24年には進学を潔しとしなかった。」とあったが、24年にも旧制一高生には一定の特権があったのか否か。あるいは一般の入試に応じなければ入学できなかつたのか↓〔記録なし〕

・ 大正九年五・六月、東京帝大学生会設立趣旨書の全文の有無↓〔記録なし〕

- ・ 理科会粋は全部で何巻出版されたのでしょうか↓総図参考掛に調査

- 依頼「明12・12より明17までと推測される。全部で5巻らしい。」
- 昭和3〜8年の工学部の学科（採鉱及冶金学科）及び東京大学の概要↓「記録なし」
- 昭和20年頃の東大学生の服装について知りたい↓一九八二年版『本郷の学生生活』五四頁を朗読、あとは広報へ
- 昭和4年に授業料が100円から120円に上がった、②昭和20年に授業料が120円から150円に上がったのは確かですか↓「一覽」でチェック。①は確認できたが②は不明と回答
- ①伊東祐賢（医師）は東大の前身校の第一回卒業生ときいているが、前身校とは何か。また、このことは事実か。②伊東徹太は明38・12・25医科大学卒ということを書いている。銀時計をもらったとも伝えられているが、本当かどうか↓①不明、②明治39年7月10日卒
- 東京帝国大学農学部実科は今の何ですか↓昭和10年に農工大として分離
- 明治26〜29年に斯波貞吉が文科大学選科英文科に在籍したか否か↓『帝大一覽』明28〜29の在籍者名簿に見える旨返答
- 昭和40年頃の学生帽の形について、角ですか丸ですか↓角帽と回答。現在も学部共通細則には「所定の制服制帽を着用すること」とあるが、制帽が着用されていたのは昭和31〜32年頃までで、以降は殆んどみられなくなっている。応援団等についてはどうかとの質問には「その時のみ着用しているようだ」と回答
- ①大正初年の東京帝大法科大学生の実態を知りたい。②留学生の派遣システムについて↓回答①唐沢『学生の歴史』、『東京帝国大学一覽』、『東京大学法学部百年史稿』。もっとリアルにしたいなら、小説がよい。ex『三四郎』『学生時代』等も参考としてあげる。②渡辺正雄『近代日本海外留学生史』、石附実『近代日本の海外留学史』
- 明治45年頃の学生証があったかどうか。あったとしたらどのような様式であったか↓図書館閲覧票は明治20年代から有。S2から写真をはるようになった（現行様式）。学生証携行規定はS16↓
- 駒場農学校と『五十年史』下巻口絵にある農科大学の写真とは同じ位置にあったのでしょうか↓『母校独立記念号』に該学校写真有と回答
- 東京大学前身校の卒業生数について↓明治9年東京医学学校卒業生25名、11年東京大学法学部卒業生6名、13年東京大学文学部卒業生8名、駒場農学校卒業生45名、26年帝国大学卒業生151名（依拠資料『文部省年報』、『駒場農学校一覽』）
- 開成学校時代のドイツ語講義録のようなもの、or紀要などはありませんか↓「ない」と回答
- 蕃書調所の碑が立っている現在の場所はどこか↓不明、『東京大学百年史 通史一』一七頁〜「九段坂下竹本図書館屋敷」を読み上げる
- 小原省三という人物が明治七〜二八年頃、東大南校に「講師」などで在籍していたと伝えられているが、何かこれを証す史料はないか。因みに同人は石黒男爵と同じ年代で親交があったと伝えている
- ↓石黒忠恵『懐旧九十年』（岩波、青161〜1）一八一〜一八二頁に記述あり

・工学部応用物理学講座（S 10・9 設）が出来る前に計測工学といっていた時代があるはずだがいつか↓S 10・9・18 応用物理学講座、S 20・6・16 計測工学講座設置（出典・『略年表』付表、『東京大学百年史 資料一』& 『同二』セラ）

・昭和20〜34年にかけての学位論文審査手数料の変遷について↓昭21
・4・1、300円、22・4・1、500円、23年1,000円、27年5,000円、31年7,500円、39年7,500円、42年1万円、51年2万円（出典・『東京大学百年史 資料一』収録のもの）

・伊東玄朴の生年月日↓寛政年庚申12月28日生、明治4年正月2日逝去、享年七十二（伊東栄『伊東玄朴伝』より）

・『大日本維新史料』稿本明治元年閏四月七日の記事中に「帝国大学蔵、復古記ならびに制度事務局叢書」云々とあるが、図書館にはない。どこにあるのか、今あるのかどうか、あればその内容についておしえてほしい↓「わからない」と返答

・工・大河内正敏教授の業績について。造兵学科で「物理実験」が基礎科目とされたのは昭和2年から良いか↓大河内正敏「物理実験」の科目設置。M 43—44 機械工学実験・電気工学実験、44—45 大河内造兵第一担任、実験工学／同（実験）（初出、機械工学実験はなくなった）、T 元—2、2—3、3—4 同上、4—5 物理実験、

5—6 同上、6—7 同上・この年より火薬学科にも登場、7—8 同上、8—9 必修物理学実験、火薬学科でも同じ、9—10、10—11、11—12、12—13 同上、13—14 ○物理学実験、14—15、15—S 2 同上。「学生ハ在学中四十単位以上ノ科目試験ニ合格スルヲ要ス、但

シ其内十三単位以上ハ第三条記載ノ科目中○印ヲ附シタルモノナルヘシ」（出典・『東京帝国大学一覽』）

・明治25年の職員録はないか。帝国大学寮宿舍にいた「高根虎松」という人物を確認したい↓明治25年職員録はない。M 26 職員録には当該人物の人名は見当らず。国立公文書館に職員録が揃っているはずだと助言

・アーク灯がはじめて点灯されたという工部大学校は現在のどのあたりにあったのか↓千代田区霞ヶ関（会計検査院西口通用門脇に工部大学の記念碑がある）。参考文献①瀬尾政夫『故事片々』、②『東京女学館史料』③『会計検査院百年史』

・東京大学の創始者はだれか、明治十年頃場所はどこにあったのか↓『東京大学百年史 資料一』六八頁下段、「三東京大学創設にとともなり東京開成学校、東京医学校宛達（各通） 明治十年四月十二日

／東京開成学校 其校及東京医学校ヲ合併シ自今東京大学ト改称候条此旨相達候事 明治十年四月十二日 文部大輔田中不二麿／東京医学校 其校及東京開成学校ヲ合併シ自今東京大学ト改称候条此旨相達候事 明治十年四月十二日 文部大輔田中不二麿」とある。医学部は本富士町、法理文学部は神田錦町にあった。

・『東京大学百年史 通史一』六八〇頁、第一表中、「明治12・7・10、法学士15」とあるが、卒業生はこの時9名だったはず。間違いではないか↓『東京大学年報第八』八頁の記述により、学位授与式と卒業証書授与式の差異について説明

・大3〜5年頃の帝大の卒業生名簿に「東国太郎」の名前があるかと

うか↓大正6年7月卒業、法学部政治学科に富永国太郎（徳島）があった。養子に行っているとのことで上記の人物ではないかと連絡したが、養子姓は富永ではないとのこと。結局不明

・学徒出陣等で犠牲となった学生の名簿はないか↓なし

・①明治10年頃の入学試験問題はないか。②明治7年東大予科入学者名簿はないか↓①②とも「なし」と回答

三、補記

記録に残されていない質問のいくつかを、記憶をたよりに記しておきたい。

その1 質問の内容は忘れたが、ようやく回答を引出して連絡したところ、こちらがすべてを話しおえたら、むこうから「バカヤロウ」のひとつで電話が切られてしまったという経験。

その2 道案内の質問がとびこむこともある。「弥生式土器の出土場所はどこですか。子供を連れて行ってやりたいのですが」↓「地下鉄千代田線根津駅下車、千駄木寄出口より出てすぐの交差点を右に曲って坂をのぼり切ってください。二ツ目の信号を左に折れると左側、角から二、三軒が自動車修理工場です。この工場の入口左わきに小さな掲示板のようなものが立っていて、それが弥生式土器の出土場所を示す由緒書です」

その3 時事関係 昭和60年2月中旬、事務局各所より臨時教育審議会がらみで、大正8年の学年暦改正経過に関する全く同趣旨の質問が相次いだ。文部省内の担当者たちがそれぞれ東京大学内の知己をたよ

り、同時多発的に問合わせ、学内の人々はいずれも結局のところ、編集室に質問したというこらしい。

その4 記憶にもはっきり残らない質問。「東京大学創立百年はいつですか」「東京大学は昔、どこにありましたか」「帝国大学分科大学（あるいは文科大学）と書いてあるものを見たが帝国大学文学部の間違いではありませんか」「東京帝国大学理科大学は今の東京理科大学とはちがうのですか」等々、編集室の本務である東京大学百年の歴史の中では基本的な情報に関する質問には、資料なしで回答できてしまうため記録が少ない。更に知人・友人などからの個人的な問合わせの形になると、ますます記録に残りにくくなる。

『東京大学百年史』の刊行事業の進行と共に、今後レファレンスの要求の増加が予想される。規模縮小・閉室を予定している百年史編集室のスタッフの「個人の善意」による、これまでのような形のレファレンス・サービスで、十分に対応できるとは到底考えられない。このような近い将来に予測される状況に対して、どのような方針で臨むべきか、考えておかなければならない。ひとつの考え方として、レファレンス・サービスは百年史編集室の設置目的に含まれていないとして、一切取り扱わない、という方針もあり得るだろう。しかしながら学内他部局や他の国立史料保存利用機関をはじめ、大学内外の研究者などが、レファレンスの部門で百年史編集室に寄せる要求や期待は、本稿に掲げた資料を見ても明らかであり、これらの機関や研究者との相互協力関係を発展させてゆくためには、そのレファレンスの要求に

積極的に応えることが必要である。さらに研究成果を社会一般に広く還元するという大学自体の基本的目標に照らしても、大学内にレファレンスの要求に応ずる機関があることが望ましい。東京大学史に関するレファレンスに応じられる機関が現在のところ他にない以上、新たに一機関を設置するか、百年史編集室でその業務に取組む以外ないだろう。以上のような見方をすれば、我々の取扱うべきレファレンスの種類などについての具体的な基準の作成をはじめ、各方面にわたる体制づくりが必要である。それは東京大学に課せられたこれからの課題であろう。

一九八五・七・二六

(おがわ ちよこ 東京大学百年史編集室)